

正岡子規・夏目漱石生誕150年記念特集号



生誕150年
since 2017

—松山から世界へ
そして未来へ—

子規と 漱石

2人が育んだ 「友情」と「志」を後世へ



正岡子規 (明治28年)

松山出身の俳人・正岡子規と、東京出身の文豪・夏目漱石。同じ年に生まれた2人は、明治という激動の新时代の中で身を立っていきこうと、勉学に励み、東京で出会います。彼らは互いにその才能を認め合い、友情を育み、やがて日本の近代文学に大きな足跡を残すことになりました。

2人が52日間共に暮らした松山には、彼らの足跡、そして創造と革新の志が今も息づいています。多くの俳人、文学者を生み出し、歴史と文化を現代へ継承するこのまちには、「坊っちゃん文学賞」「俳句甲子園」など、新たな「ことばのちから」が満ちあふれています。



夏目漱石 (明治29年)

正岡 子規

1867-1902



松山藩士・正岡常尚の次男として松山に生まれる。本名は常規(つねのり)。政治家を志し上京、大学予備門・第一高等中学校時代に漱石と親しくなるが、このころ咯血し結核と診断される。帝国大学文科大学に進むが中退を決意、日本新聞社に入社。ジャーナリストとして働きながら俳句や短歌に洋画の「写生」の手法を取り入れた革新運動に取り組む。日清戦争の従軍記者となるが帰国途中に体調を崩し、須磨(現在の神戸市)で療養後、松山に帰郷。そこで教師として赴任していた夏目漱石と共同生活を送る。帰京後は病気が悪化し、結核菌に脊椎が侵される「脊椎カリエス」と闘いながらも、34歳で亡くなる直前までさまざまな分野の文学革新運動に精力的に取り組む、日本の近代文学に大きな足跡を残した。

好奇心旺盛であった子規は学生時代、当時米国から日本に伝わったばかりのベースボールに親しんだ。松山に初めて野球を伝えたといわれ、「打者」「走者」などの野球用語を考案したことなどから、2002年に野球殿堂入りを果たしている。



野球ユニホーム姿の子規

夏目 漱石

1867-1916



町方名主を務める夏目小兵衛直克の五男として江戸に生まれる。本名は金之助。第一高等中学校時代に子規と知り合い、以後親友となる。東京帝国大学を卒業後、愛媛県尋常中学校に英語教師として赴任。そこで帰郷した子規と再会、52日間の共同生活を送り、俳句の指導を受ける。熊本への転勤を経て、文部省から英文学研究を命じられ2年間英国に留学する。海外でも子規との友情は変わらず手紙を交わしていたが、留学中に子規は帰らぬ人となる。帰国後、大学講師を務める傍ら、子規の門人・高浜虚子からの助言で『吾輩は猫である』を執筆、雑誌「ホトトギス」に連載し作家活動に取り組む。

漱石の代表作『坊っちゃん』は、漱石の松山赴任時の様子がモデルとなったといわれ、多くの市民に親しまれている。



愛媛県尋常中学校

目次

- 2人の足跡と功績 2・3面
- 子規・漱石ゆかりの地ほか 4面

発行：松山市役所
編集：総合政策部シティプロモーション推進課 ☎089-948-6705
city-promo@city.matsuyama.ehime.jp



松山市長
野 忠 克 仁

「春や昔十五万石の城下哉」
明治28年、新聞記者だった子規が日清戦争の従軍記者として中国に旅立つ前、帰郷した頃に詠んだ句で、故郷松山を慈しみ、目に焼きつけようとするかのような句といわれています。

一方、松山赴任時の体験をもとに漱石が書いたといわれる小説『坊っちゃん』は、多くのの人に読まれ、市有施設や民間商品の名称に使用されるなど、松山の観光・文化振興、

2人が残した宝を後世に

情報発信に大きく寄与してきました。

2人が残した「松山への思い」は、松山に多くの宝を残してくれました。特に2人が、松山の漱石の下宿「愚陀佛庵」で共に過ごした52日間は、2人の人生と、日本文学発展に大きな影響を与えました。

彼らの生誕150年を機に、2人の足跡を再認識し、功績を後世にしっかり伝えていくことが、私たちの責務だと思っています。

市長メッセージ